

●モーツァルト：歌劇「フィガロの結婚」序曲

一度聴いたら忘れない特徴ある半音の動機で始まり、まもなくトゥッティ（全合奏）となって、明るく楽しい音楽が颯爽と駆け抜けて行く。が、途中、ふと日が陰ったかのようにイ長調の中にイ短調（再現部では二長調ー二短調）が現れ、ヴァイオリンのヘ音（再現部は変口音）の持続に導かれてファゴットと低弦によって小枝が風に震えるような寂しい動機を出す部分があり、印象的である。

●ハイドン：交響曲第104番二長調「ロンドン」

ハイドンの作品は、天才が一気に筆を走らせたモーツァルトとは趣きが異なり、例えば弦の細かな動き一つさえ時間をかけて練り上げられたように見え、独特の味わい深さがあり、意外に演奏が難しい。「ロンドン」はその中では実は最も音符がシンプルな部類で、動機も和声も構成も一見それほど独創的とは感じられず、正直初めのうちは拍子抜けだったのだが、やればやるほどじわりと滲み出るような渋味・旨味が出てきて、演奏する者を飽きさせないのだ。今夜の“本番”も「やればやるほど」の中の1頁であり、どんなものになるか、聴くと奏でるの違いはあれど、“きょうのハイドン”と一緒に楽しんで頂ければと思う。

●ベートーヴェン：交響曲第8番へ長調

第7と第8の2つの交響曲はほぼ並行して作曲され、作曲者自身は第8の方が気に入っていたと伝えられる。“リズムの神化”“舞踏の聖化”と称されその魅力を象徴的に特化説明できる第7に対し、第8はいわば“歌あり踊りあり物語ありユーモアあり”の多彩な魅力を持つ。特に第1楽章はまるでよくできた短編映画や紙芝居のように、てきぱきとした場面転換を伴って充実した音楽が繰り広げられる。短く速い第2楽章は、楽しく軽く少し謎めき、この曲が“小交響曲”と慕われる一番の理由であろう。つづく第3楽章には通常の速いスケルツォではなくのびやかなメヌエットが置かれ、典雅な装いでしっかりと腰を下ろしている。第4楽章では、走馬灯のような短い展開部と、楽章全体の何と約半分を占める長大なコーダ（終結部）とが呼応し、ベートーヴェンの“思索する情熱”が見事に音と響きに具現化されていく。最後は主和音属和音の連続強奏が、小振りの中身の詰まったこの交響曲を自らにふさわしくしめくくる。

小西 収

フロイントは、やわらかい。

どこまでが団員で、誰がゲストなのか、誰にもわからない。フロイントの演奏に参加しているとき、その人はフロイントだ。もちろん出席なんかとらない。入団届けも退団届けも、ない。フロイントはゆるやかに手を繋ぎあった、人々の輪だ。我々がフロイントに「属して」いるのではない。我々一人一人の心の内に、フロイントは、やわらかく存在している。

フロイントは、あたたかい。

規則やルールは存在しないが、それぞれが、それぞれを見つめて、その話を聞き、そして考えている。社会人が多いから、という理由では決してないのだが、フロイントは「おとな」のオーケストラだ。団費も、それぞれが勝手に自分の責任で預けていく。誰もそれを管理しないし、咎めない。

フロイントの音楽は、我々自身に正直だ。

フロイントには「練習」が存在しない。みんながフロイントに集まって合奏するとき、それはいつも「本番」だ。誰に聴かせるための音楽をしているわけでもない。自らが音楽を求めて集まり、一つになるうとする。フロイントにとっての「演奏会」は、お客さんがいる状態での合奏を楽しむ、ちょっと特別な日に過ぎない。日頃の「成果」を発揮しない。日頃の「愉しみ」のお裾分けである。

そしてフロイントは、ただ「仲良し」なだけのサークルではない。

フロイントには「小西収」がいる。指揮者としての彼が、我々にほとぼるような音楽的情熱で対してくれるので、我々は、それに「応え」ようと熱くなる。我々は、小西収に音楽を求められる、という「喜び」を知っているオーケストラだ。

やわらかく、あたたかく、正直で、情熱に溢れたオーケストラ、それがフロイントだ。

私は、そういうフロイントを、とても愛している。

大石 聡

# Ensemble Freund The 5th Concert

アンサンブル・フロイント 第5回演奏会



指揮：  
小西 収  
Konisi Syû

2003年6月14日（土）  
豊中市立ローズ文化ホール

午後7時開演

〈 Program 〉

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト  
Wolfgang Amadeus Mozart (1756~1791)

歌劇「フィガロの結婚」序曲K.492  
“LE NOZZE DI FIGARO”Ouverture K.492

ヨーゼフ・ハイドン  
Joseph Haydn (1732~1809)

交響曲第104番二長調「ロンドン」  
Symphonie Nr.104 D-dur Hob. I/104“London”

休憩 (15分)

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン  
Ludwig van Beethoven (1770~1827)

交響曲第8番ハ長調 作品93  
Symphonie Nr.8 F-dur Op.93

〈 Profile 〉

指揮：小西 収 (こにし しゅう)

1965年生まれ。帝塚山中学校・高等学校勤務(数学科&吹奏楽部)。1987、88年に大阪市立大学交響楽団学生指揮者としてシベリウス第2、ブラームス第2・第4、チャイコフスキー第5の4交響曲を演奏。音楽に関しては高校時代より独学の道を行ってきたが、最近、女満別小林研一郎指揮法セミナーに2回参加。昨年の関連コンサートでは、セミナー受講生たちが『運命』冒頭しばらくを指揮するコーナーにおいて「爪を隠し」無理をして普段の自分と正反対の正統的解釈(運命動機をスタッカートで強奏など)で指揮、“炎のコパケン”に「(3つめの)フェルマータ直前の切迫感はずばらしい」と誉められ、また「そこだともう遅い」と叱られる。「出て来方、歩き方からもっと堂々と、例えば後ろ歩きなど練習するとよい」と言われ、出番交替時に舞台から後ろ歩きで引っ込み、地元聴衆の笑いをとる。

時代が求める新しいオーケストラ像

オーケストラは、時代によって変化してきた。しかし変わらないのは、形ではなく、そこから奏でられる音楽が大事だということだ。それを踏まえていくつかのキーワードをピックアップしてみよう。

●オーケストラの形

20世紀後半から一番勢いがあるのは、古楽器を使った室内オーケストラだろう。いわゆるフルサイズのオーケストラでも、古楽器奏法をとりいれているところもあるし、室内オーケストラでも、大きな編成を必要とされている曲も、積極的に取り上げられている。

●インターナショナル

ドイツの中堅オーケストラを聴くと、まるでアメリカの地方オケを聴いているようだ、という話を聞いたことがある。しかし良く考えてみると、アメリカのオーケストラも初めはドイツやフランスなど、ヨーロッパのオーケストラを模範にしてきたわけで、時代がまた変化すれば、逆の評価になりえる可能性もあるのではないだろうか。わたしは今の時代でも、オーケストラは固有の響きを持っていると考えている。

●指揮者

一昔前ではオーケストラはしばしば指揮者とセットで語られてきた。しかし今はどちらかといえば、いわゆる世界を飛び回るマエストロの方が多いのが現実であろう。



さて、アンサンブル・フロイントである。

ご存知の通り、この団体は指揮者「小西収」を中心に集まったオーケストラであり、当然最初は「小西収」の音楽、すなわち「奏でられる音楽」が中心であった。個性とは音楽か、響きか？

答えの難しいところだが、指揮者を中心としたアマチュア・オーケストラはどうしても指揮者の個性が反映される。事実アンサンブル・フロイントの初期の演奏を聴くと、まさしく小西収の個性による、古典の大作曲家の音楽を使った「冒険の旅」が繰り広げられていた。

しかしながら設立当初から継続して取り上げてきたベートーヴェンを聴く限り、ここに来て変化が表れてきたように感じる。前回の演奏会でもベートーヴェンが取り上げられたが、オーケストラに余裕というか、初期の演奏とはなにか違う雰囲気が出てきたように感じるのだ。わたしはこれをアンサンブル・フロイントの固有の響きが出てきた、と解釈する。また、オーケストラの形から言えば、今の編成と奏でられる音楽がマッチしてきた、とも言えるだろう。そういう意味で今回の演奏会のベートーヴェンも楽しみだが、ハイドンでどのような音楽が聴けるのか、大変興味深いところだ。

これからは「アンサンブル・フロイント」の音が求められる。

アンサンブル・フロイントの「最初の旅」は終わった。今から新しい旅に出発するオーケストラに大きな期待をしつつ、今晚の演奏を楽しむことにしよう。

林 秀志 (ときの交響吹奏楽団)  
(コンサートマスター)